

埋 蔵 文 化 財 愛 知

No. 35



刀池古窯跡群（知多市）

刀池古窯跡群は、知多市大興寺の丘陵地帯にいくつかの支群にわかれて所在している。今回は、1985年に知多市教育委員会が一部を調査した刀池11号窯を含む地域を、愛知県企業庁による工業用地造成に先だって、愛知県埋蔵文化財センターが7月から10月まで調査した。

窯は尾根の北側斜面に2基、南側斜面に4基の合計6基が確認された。北側斜面の2基は、いわゆる山茶碗と小皿を中心に焼成しており、うち1基では床面下から山茶碗を伏せて並べた除湿施設が検出された。一方南側斜面の4基は、いずれも甕・壺を中心に生産している。そのうちの1基では、床面下から陶丸やほぼ同じ大きさのさいころ状の製品がまとまって検出されている。

これらの窯の実年代は、従来の年代観に従えば、北側斜面の2基は12世紀末から13世紀前半、南側斜面の4基は13世紀半ばから後半といえよう。

（調査研究員 余合昭彦）

シリーズ ものの移動を考える 3

中世土器の移動 (中世前期を中心に)

10世紀以後、各地の須恵器生産が崩壊し、それに代わって低火度焼成を原則とする土器が生産されるようになる。瓦器や黒色土器または土師器といった土器類がそれである。

ところが当地域では、全国的な動向とは逆行して、生産施設に大規模な窯体を使用し、低コストを原則とする硬質土器の生産が行われた。具体的には灰釉系陶器と施釉陶器（いわゆる「古瀬戸」）である。

灰釉系陶器は、中世後期に斜陽を迎えるものの、供膳具と貯蔵具に比重を占める生産体制をとった。これらは素地を「白色」に焼成することを原則とし、供膳具に関しては他種の土器や他素材の容器類を模倣した器種で構成される。灰釉系陶器は、12世紀～13世紀前半に生産内容が多角化しているようで、使用する胎土の違いから、大きく二分できる。その一つは密な胎土を使用し、器壁を薄く仕上げる一群、他の一つは胎土に混和材（砂粒）を使用する一群である。これらは前者が美濃窯に代表されることから北部系、後者が猿投窯・瀬戸窯・知多窯などに代表されることから南部系と呼称されている。また、南部系のうち、特に知多窯では個々の窯で供膳具と貯蔵具が分業化することも知られている。

一方、施釉陶器は瀬戸窯に代表されるものである。生産内容は、おおむね14世紀を境に、貯蔵具生産主体の生産体制から、供膳具主体のそれへと変容するものの、ほぼ中世を通じて生産された。

施釉陶器が日本各地に移動したのに対し、灰釉系陶器は、特定の器種を除けば、おおむね生産地周辺に非常に濃密に分布する傾向を示す。つまり後者は在地消費志向を強く持った土器で、他地域での瓦器や黒色土器または土師器と整合する性格を持っていると考えられる。

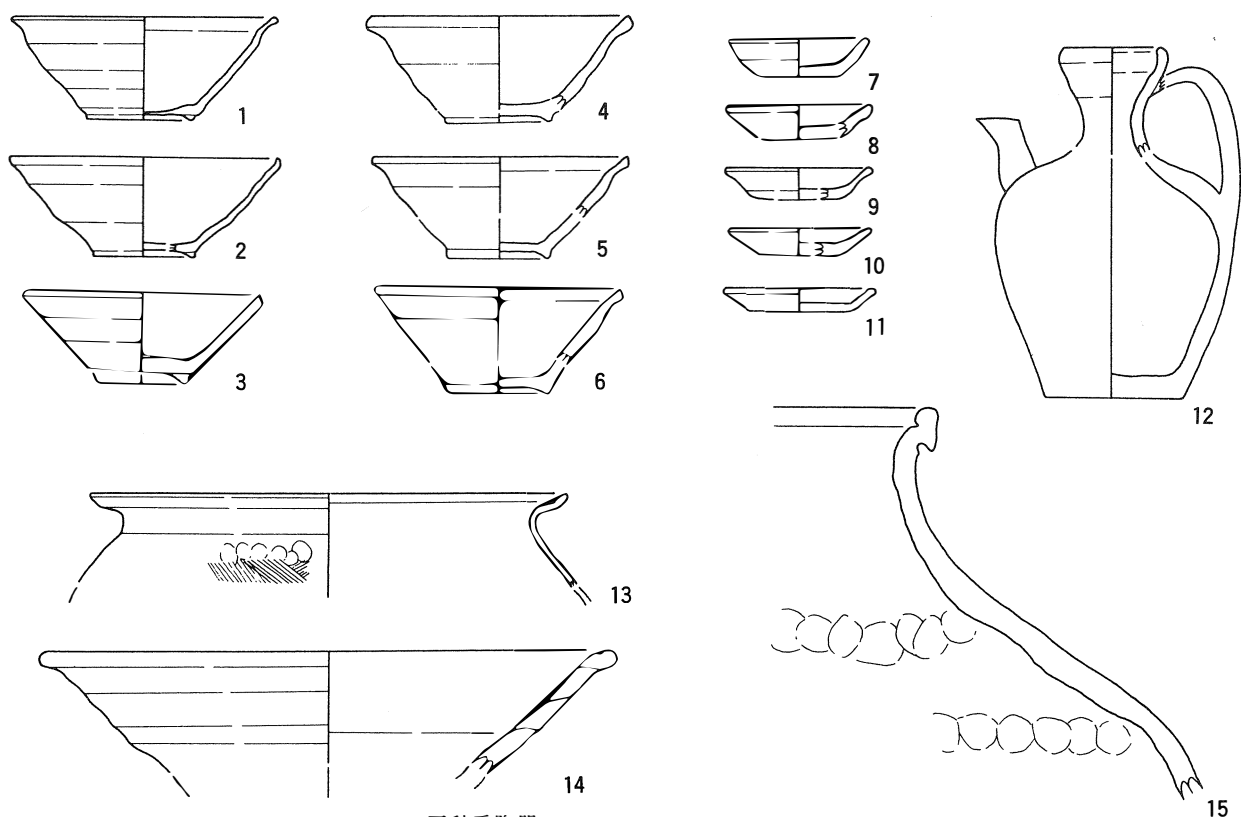
当地域の土器組成は、上記の施釉陶器・灰釉系陶器を基本とするが、これに貿易陶磁・土師器などが加わる。具体的には貿易陶磁が供膳具と貯蔵具、土師器が供膳具と煮沸具にみられるが、実際の集落遺跡からは、これらが複雑にからみ合って出土する。しかもこれは各々が補完関係にあるのではなく、同一の器種で競合している場合が多い。なおこのような状況は土器に限られるわけで

はなく、ほかの素材（金属・木材などの日常道具）でも見られる現象となっている。

こうした現象は、いうまでもなくものの移動の結果である。ここで、灰釉系陶器・施釉陶器・貿易陶磁・土師器について、生産地からの距離を基準にして大まかに分類すると、海外から輸入されたもの（超広域移動）、ほぼ全国を移動するもの（広域移動）、一国ないし数国程度を移動するもの（狭域移動）、一郡ないし一国程度を移動するもの（超狭域移動）に区分できる。これを当地域にあてはめると、貿易陶磁が超広域移動、施釉陶器が広域移動、灰釉系陶器が狭域移動、土師器が超狭域移動となる。ただし灰釉系陶器のうちでも貯蔵具（甕・壺類）は広域移動に区分でき、太平洋沿岸などでいくつかの出土地が確認されている。また、土師器のうちでも煮沸具の特定器種（図の13）は広域移動に区分でき、東海地域から関東地域にかけて出土地が確認されている。低火度焼成で、しかも器壁を薄く仕上げる脆弱な土器が広域移動することは注意すべきであろう。

こうした状況は他にもある。右図は西春日井郡清洲町土田遺跡から出土した土器の一部であるが、尾張低地での灰釉系陶器の供膳具が、13世紀後半頃に、従来の南部系優勢の状況から北部系優勢へと変化していることを示している。これは生産地からの距離を考えると非常に不可解な現象である。ところでこれを「商業」との関わりで説明しようとする考え方がある。この考え方は、権門の庇護下での生産から、商品的な要素の強い生産への移行が、中世前期という時代を前後して発生するとみるのである。「商業」の存在を考えた場合、上記の問題は理解しやすい。

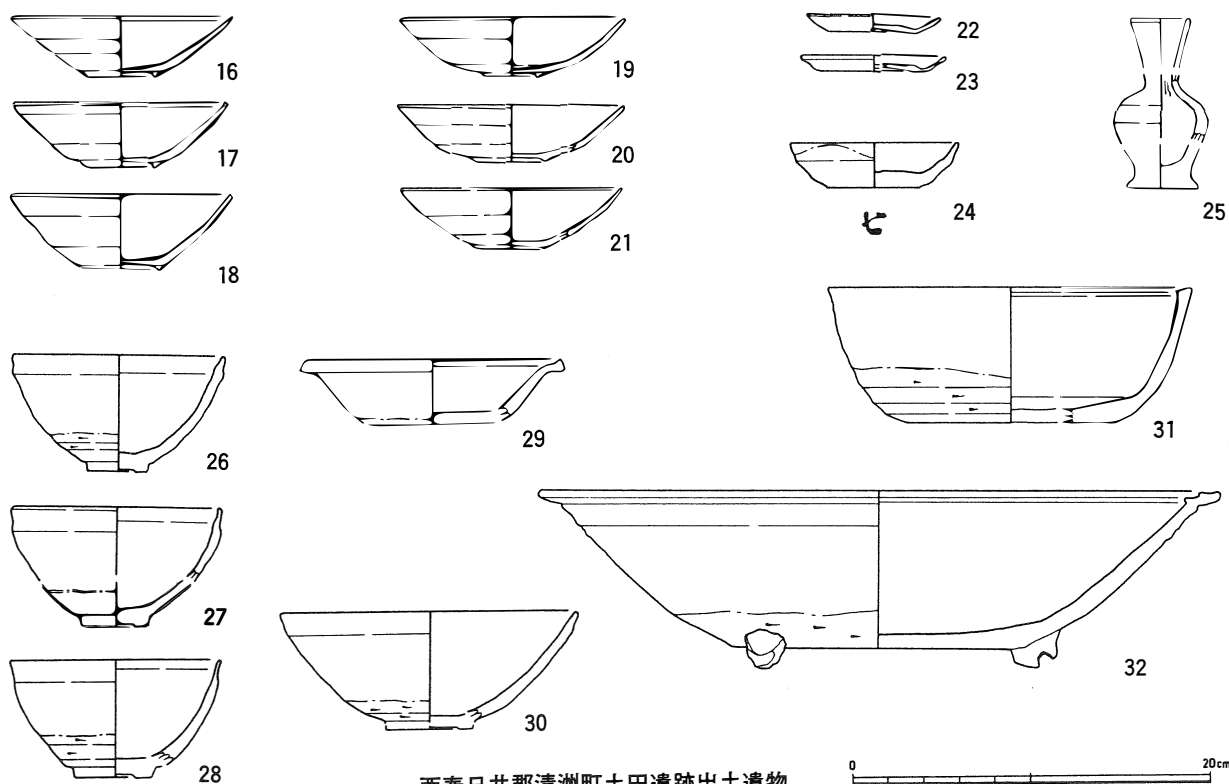
中世土器の移動を考えると、各事例をどの様に理解するかが問題となってくる。ただし現状では遺物が最終的に消費地において廃棄された状況のみを確認できるにすぎない。生産地から出土地までの「移動」については、生産地からどのような経緯でその出土地にまで移動したのか、そのメカニズム、すなわち流通にこそ本来注意を注ぐべきであると考え。（調査研究員 池本正明）



1～11・14～23
12・24～32
13

灰釉系陶器
施釉陶器
土師器

1～11 南部系の灰釉系陶器
16～23 北部系の灰釉系陶器



西春日井郡清洲町土田遺跡出土遺物

0 20cm

愛知県埋蔵文化財センター『土田遺跡』1987より引用

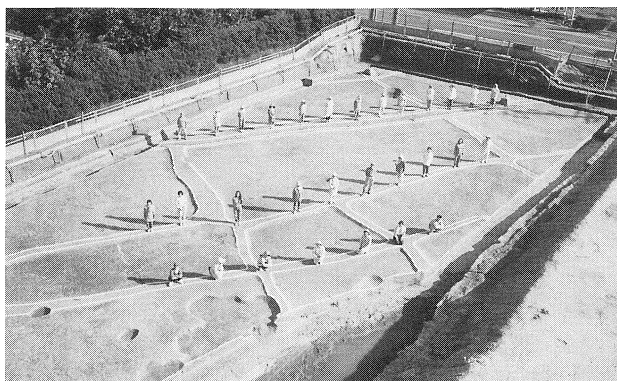
◀ 遺跡紹介 ▶

大毛池田遺跡

一宮市・葉栗郡木曽川町

大毛池田遺跡は一宮市北西部から葉栗郡木曽川町にかけて広がりをもつ遺跡であり、木曽川によって形成された自然堤防上に立地する。発掘調査は東海北陸自動車道建設に伴う事前調査であり、本年度は7,590㎡の調査面積を実施・予定している。

これまでの調査で、大きくⅠ期(古墳時代前期)、Ⅱ期(古代)、Ⅲ期(中世)、Ⅳ期(戦国期)の4期に分けられる遺



古墳時代前期の水田跡

構・遺物を確認した。Ⅲ、Ⅳ期の遺構では溝・土坑等があり、Ⅱ期では竪穴住居19棟を検出している。今回とりわけ注目すべきはⅠ期の遺構であり、水田跡を良好な形で確認することができた。ここではその水田遺構を中心に紹介したい。

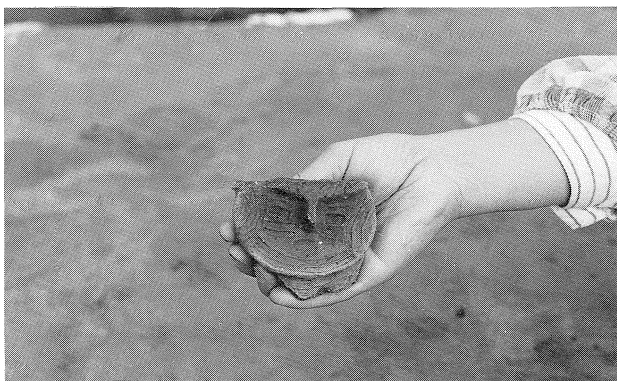
今回検出された水田跡は南北方向にのびる大畦畔とこれに沿って整然と配置された長方形の小区画で構成されている。特徴的な大畦畔は幅80cm、高さ18cm、断面は台形状を呈し、両側に取水・排水に使用されたと思われる浅い溝を伴っており、小区画をなす畦畔とは規模、機能とも明らかに区別されていることがわかる。小区画を構成する畦畔は平均して幅30cm、高さ5cm未満で所々に水口が設けられていた。水田一区画の規模は、最大が16×8m、最小は6×3mとばらつきがあるものの、大畦畔から遠ざかるにしたがって面積が小さくなる傾向がみられる。

水田からの出土遺物にはS字甕、「く」字甕があり、すべて畦畔のコーナーに近い地点からまとも検出された。これらの遺物の周辺には焼土の広がりもみえることから水田耕作に関わるなんらかの儀礼が行われた可能性が想定される。(調査研究員 北條真木)

島田陣屋遺跡

新城市

島田陣屋遺跡は、新城市野田字西郷に所在する弥生時代から近世にかけての複合遺跡で、豊川の右岸に形成された低位段丘上に立地している。発掘調査は野田城大橋建設に伴う橋梁改築によるもので、愛知県土木部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、昨年度の1,000㎡の調査に引き続き、本年度は7月から11月にかけて1,680㎡の調査を実施した。



人面付土器

弥生時代の遺構としては、後期の方形周溝墓1基が検出され、周溝内から壺等の供献土器の他、人面付土器が出土した。人面付土器は人面部分のみで、眉と鼻は粘土紐の貼り付け、他は沈線で表現され、表面には赤彩が施されている。

戦国期の遺構としては、幅3.5mを測る区画溝2条、複数の建物跡、石組の井戸、竪穴状遺構等が検出されている。特に調査区南端で検出された溝は、その一部を埋め石垣が築かれており、入り口部分を拡張した状況が確認されている。これらの遺構からは、16世紀を中心とした土器、陶器等の遺物が出土している。

当地は江戸時代になると島田氏の陣屋となり、文献にも記述が見られるようになる。本年度の調査では、区画溝1条と石垣が検出され、昨年度の調査成果と合わせると、陣屋の敷地内が南北に3つに区画されていたことが明らかになった。中央の区画では掘立柱建物が検出され、南の区画からは根石のみられる柱穴をもつ建物跡、埋設された甕、廃棄土坑等の遺構が検出されている。

(調査研究員 原田 幹)

◀市町村だより▶

御用地遺跡

安城市



御用地遺跡は、安城市北部、矢作川右岸の碧南台地上に位置している。調査は、平成5年10月から平成6年3月までの予定で、現在も継続中である。これまでに、縄文時代晩期（元刈谷式～五貫森式）と古墳時代後期～平安時代の、大きく2つの時期の遺構が確認されている。

縄文時代晩期においては、平地式円形住居跡、甕棺墓、廃棄土坑などの遺構と、元刈谷式、桜井式、稻荷山式、五貫森式の各土器片、石鏃、磨製石斧、黒曜石片などが見つかった。

古墳時代後期～平安時代の時期では、現在までに19棟の竪穴住居跡が確認された。うち8棟は一辺が7m前後の方形で、北の壁にカマド、その東に貯蔵穴（上部は円形だが底部は方形）、西に出入口という共通性が認められる。写真の住居跡の床面からは、隼（6世紀末）3点が出土している。

（安城市歴史博物館 斎藤弘之）

小針遺跡

岡崎市

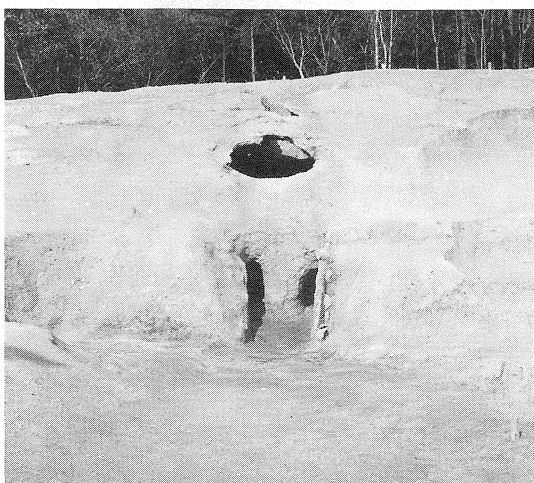


本遺跡は、点在する城郭に関連した字名と一部に痕跡の残る濠跡から大規模な総構えが想定される小針城跡として知られていたが、平成4年度に実施した区画整理事業に先行する試掘調査の結果、縄文時代から中世にかけての大規模な遺跡であることが分かった。現在までに、遺跡西端部の第1次調査区の内、1/4の約1,500㎡の調査が終了し、古墳時代後期から奈良時代にかけての竪穴住居跡36棟分と掘立柱建物2棟などが確認されている。この住居は建て替えなどによる切り合いが頻繁で、床面から縄文時代の石鏃が検出されるなど遺存状態はよくない。ここで注目される遺物に製塩土器がある。塩が海岸部から豊田市など内陸部に運ばれたルートが矢作川右岸にあったことがこの土器からも明らかになった。今後の調査により集落の様相がはっきりしてくるものと期待される。

（岡崎市教育委員会 荒井信貴）

水南中窯跡

瀬戸市



水南中窯跡は、瀬戸市西部に所在する標高136mの丘陵南斜面を利用して構築された窯である。窯体の規模は、焚口から煙道部上端までの全長8.68m、最大幅2.44m、床面傾斜は28°前後を測る。残存状況は床面を除いて極めて良好であり、特に、焼成室と煙道部との境に空気量の制御装置（ダンパー）が検出され、その操作方法を想定できる貴重な資料を得ることができた。また、前庭部には、焚口の手前に平坦面があり、さらに、その左右には斜面を大きく掘削した一段高い平坦面が検出されるとともに、4基の土坑が確認された。また、斜面下方には扇状に広がる物原が残存していた。遺物は、山茶碗、小皿、片口鉢が大半を占め、入れ子、陶丸のほか、四耳壺、瓶子、水注、徳利型瓶、卸皿といった施釉陶器が出土している。これらの出土遺物から、水南中窯跡は13世紀中葉に操業していたものと考えられる。

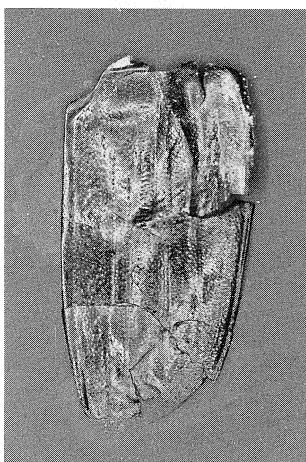
（瀬戸市埋蔵文化財センター 松澤和人）

発掘調査ニュース

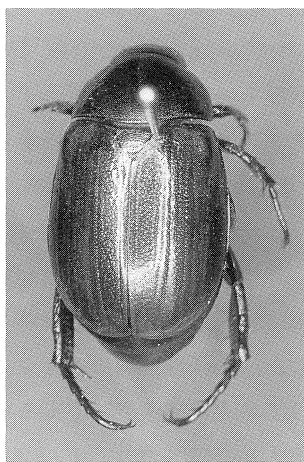
— 大毛沖遺跡出土の昆虫 —

中世の畑作遺構と害虫

大毛沖遺跡は一宮市北端、犬山扇状地の扇端より広がる沖積平野の微高地上に位置する奈良時代から鎌倉時代にかけての遺跡である。



▲大毛沖遺跡のヒメコガネ



▲現生のヒメコガネ

主な遺構として、奈良時代から平安時代の住居跡が6棟、平安時代から鎌倉時代の井戸が5基、鎌倉時代の屋敷を区画する溝、そして畝状遺構が十数条確認された。畝状遺構は畑作地と推定され、区画溝(居住域)の西側に集中して展開している。この畝状遺構に伴い、人為的に捨てられたと思われる数百個体の昆虫片の塊(仮称「昆虫ダンゴ」)で満たされた土坑が7ヶ所発見された。

「昆虫ダンゴ」は、直径10~20cmの円形あるいは楕円形、皿状を呈する土坑の底に、約3cmの厚さで昆虫の体節片のみが集積したもので、明灰色のシルトにより覆われていた。このダンゴは、元本センター課長補佐兼主査で昆虫化石に詳しい森 勇一氏(明和高校教諭)の同定によりヒメコガネを主体とし、一部マメコガネを含むものであることが判明した。ヒメコガネ・マメコガネは、ダイズ・クワ・ブドウやカキなどの畑作物や果樹の葉を食い荒す害虫である。

中世の畑作害虫の投棄は、濃尾平野ではもちろん全国でも初めての発見例であり、鎌倉時代における害虫駆除の一つの方法をかいまみることになったのではないだろうか。(調査研究員 鬼頭 剛・永井宏幸)

☆専門研修会

11月25日~26日、県下の埋蔵文化財担当者を対象に以下のテーマで専門研修会が開催され、40名ほどの参加者が熱心に受講した。

- ・福岡猛志日本福祉大教授「地方史研究の課題」
- ・三辻利一奈良教育大教授
「胎土分析による土器の生産地研究法」
- ・進藤秋輝東北歴史資料館主任研究員
「東北の古代城柵」
- ・和田晴吾立命館大学教授「古墳群の理解をめぐって
—大王墳の動向と地域の古墳—」
- ・寒川旭通商産業省地質調査所主任研究官
「地震考古学の現状」

☆現地説明会

・名古屋城三の丸遺跡(名古屋市)では、10月9日に現地説明会が行われた。戦国時代の堀や近世の上級武士の屋敷地と出土遺物が、集まった250名に公開された。

・島田陣屋遺跡(新城市)では11月20日に現地説明会が行われ、200名近い一般市民や研究者が見学した。



▲名古屋城三の丸遺跡現地説明会

埋蔵文化財愛知 No.35

発行 平成5年12月20日
編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター
〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田
字野方802番24
TEL 0567-67-4161~4163
印刷 株式会社 クイックス